

Ⅲ．ワークショップの部



ポスターセッションで得られた〈4つの視点〉と基調講演・話題提供を手がかりに、グループごとに民主主義の課題を探り、解決策を提案することを目標として、ワークショップを行いました。國分さんは、各グループを巡回し、必要に応じてコメントを加えました。

ここからは、各グループのファシリテーターによる議論の振り返りをご紹介します。

1. ワークショップのグループ分け

近藤康久（地球研准教授）の進行のもと、各ポスターが〈4つの視点〉のどれにあたるのかを、発表者間で整理しました。さらに具体的なキーワードを与え、7グループに分けました。

午前中に得た視点	小分類の視点	ポスター	ファシリテーター	グループ番号
1. 大きい視野と小さい視野を行き来すること	グローバルとローカル	G-4 G-12	佐藤 麻貴 (東京大学)	1
	プラクティス	G-2 R-3 R-5	梶谷 真司 (東京大学)	2
2. 民主主義の背景、現在、結果、資本主義との関係	コモンズ	G-6 G-8 G-13	阿部 健一 (地球研)	3
3. 市民の合意形成（科学技術など）意思決定の主体の範囲	Anthropoceneと技術	G-1 G-5 R-1 R-2	寺田 匡宏 (地球研)	4
	市民参加	G-9 G-11 R-4	熊澤 輝一 (地球研)	5
4. 実践（方法）、枠組み、責任としての民主主義	民主主義の問題	G-3 G-14 R-6	近藤 康久 (地球研)	6
	災害	G-7 G-10	吉田 丈人 (地球研・東京大学)	7



2. ワークショップの進め方

グループごとに民主主義の課題として気になった点を挙げ、そこから見出された課題を整理した上で、どのような解決策がありえるのかを話しあいました。なお、以下のフォーマットを土台に議論を進めました。

- ① 問題についての議論
- ② 社会制度についての議論（制度・出来ごとから）
- ③ 提案－具体的に取り組むべき課題、行動、つくるべきしくみ、プラン、目標、およびこれらにどう結びつか。



3. 各グループでの議論

1. 大きい視野と小さい視野を行き来すること

グループ1：グローバルとローカル

ファシリテーター：佐藤 麻貴（東京大学）

G-04 福島第一原発事故の新聞言説における〈主体化〉—— 各紙の比較分析を通じて

田中 瑛（東京大学大学院学際情報学府／IHS 修士課程2年）

G-12 日本における難民受け入れの歴史の変遷

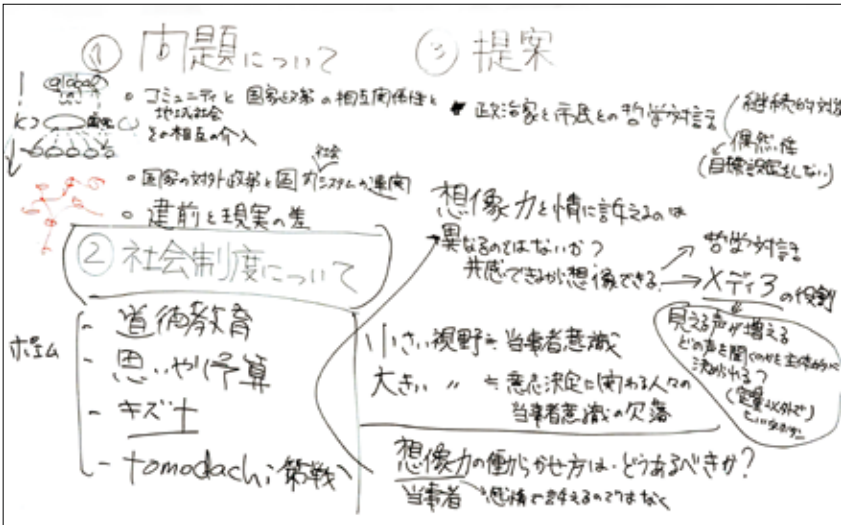
大野 沙織（京都大学大学院総合生存学館 5年一貫制博士課程1年）

福島原発事故、日本の移民政策という個別特殊な具体的事例（ローカルの事例）から、「いかにして、普遍的なもの、あるいはグローバルなものへの政策含意へと繋げていくことができるのか?」、という観点から議論をした。

そこで問題とされたのが、「ローカルで拾える個別具体的な事象を批判的に検討し、如何にして国家レベルからグローバルレベルという、ある種の普遍性へと緩やかに移行していくことができるのか?」、という問いだった。ハンナ・アーレントの「利益は集团的、意見は個別（個人）的」というヒントを國分先生から頂戴し、上記の二つの問いを、「グローバルや国家という概念を、どこまで自分のものに引き付けることができるのか?」、という問いに変換することが重要であるという共通認識にたどり着いた。そこから、当事者であることと他人事であることへの感性の違いへ議論は発展し、最終的には「想像力」と「情に訴える」ことは別であることから、「共感できるから想像できるのか?」「経験を共有しないと当事者への想像ができないのか?」という問いに発展したが、時間が来たため、ここで議論を終えた。

当該グループが結論として出したのは、次の通り。「個々人がグローバルを意識するのは、ローカルの経験に依るものであるが、ローカルの問題であったとしても想像ができなければ理解しあえない」。政策提言としては、「地域政党の創生」や「政治家と一般住民との対話」が挙げられた。

佐藤 麻貴（東京大学）



1. 大きい視野と小さい視野を行き来すること

グループ2：プラクティス

ファシリテーター：梶谷 真司（東京大学）

G-02 持続可能な教育の場としての「道場」——生涯を通しての人間形成の場

張 平成（名古屋大学教育発達科学研究科／「ウェルビーイング in アジア」
実現のための女性リーダー育成プログラム博士課程1年）

R-03 人類史とサニテーション——カメルーン狩猟採集民の事例より

林 耕次（地球研プロジェクト研究員）ほか2名

R-05 「男」の生き方と環境問題——エコフェミニズムを手がかりに

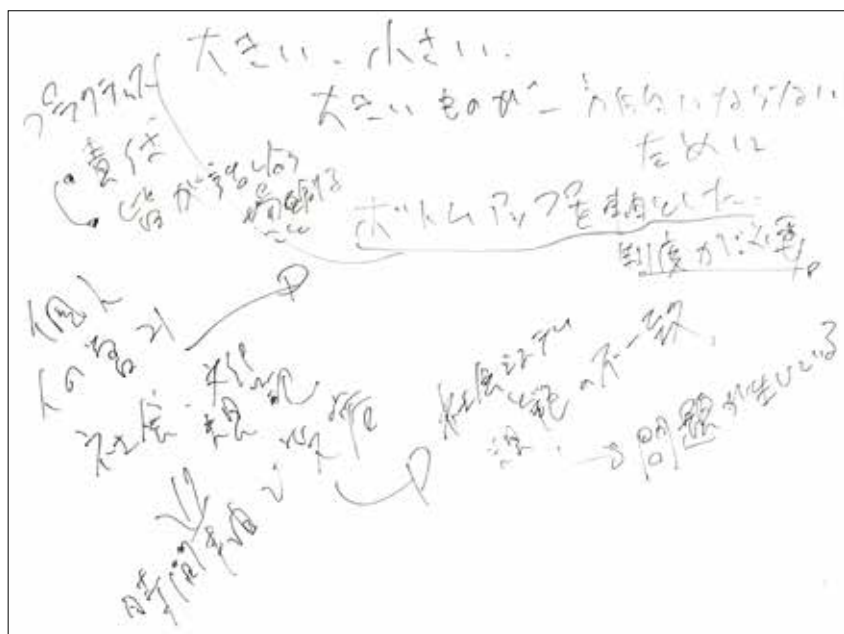
大谷 通高（立命館大学生存学研究センター／地球研センター技術補佐員）

大レベルと小レベルをどのように結びつけるかという課題について、当グループは、一般に言われるグローバルとローカルの空間的規模の関係ではなく、現在周辺の短期間と、100年単位の過去から未来にわたる長期間という時間的スケールの関係として考えた。

教育における人間関係、衛生観念・対策、男女の役割や仕事の仕方など、現在問題になっていることを近視眼的にとらえず、100年・200年前の歴史をたどり、100年後の未来まで視野に入れて考察する。そのさい新たな社会を構想するのに、昔からある慣習や伝統とどう折り合いをつけるのか、それらをどのような方向へ発展させていくのかということを考えなければならない。

梶谷 真司（東京大学）





2. 民主主義の背景、現在、結果、資本主義との関係

グループ3：コモンズ

ファシリテーター：阿部 健一（地球研）

G-06 観光を熟議する——旅と日常のあいだの民主主義

田邊 裕子（東京大学大学院総合文化研究科／IHS 博士課程1年）

宮田 晃碩（東京大学大学院総合文化研究科／IHS 博士課程1年）

G-08 ランド・アートとしてのモエレ沼公園が環境問題に果たす役割 ——ゴミ埋立地の公園造成から札幌国際芸術祭 2017 までの歩み

八幡 さくら（東京大学 IHS 特任研究員）

G-13 再生可能エネルギーが持続可能性に与える影響 ——Inclusive Wealth（新国富指標）を用いた実証分析

伊川 萌黄（九州大学大学院工学府

／持続可能な社会を拓く決断科学大学院プログラム 博士課程1年）

満ち足りた不満。感想を一言でいうと、矛盾した表現になる。満足感は、一人で考えることよりも、みんなで考えることが楽しかった、ということ。不満は、コモンズという豊かな概念を議論するには、ただただ時間がなかった、ということだ。

コモンズという顔の見える関係性の中で培われた考え方が、より広い範囲で、たとえば地球規模で通用するものになれるのか、つまりグローバル・コモンズと展開できるのか、考えるのが、我々にあたえられた課題である。そのための補助線は、宮田さん、田邊さんの「語り部」の役割、八幡さんの「美的価値」への着目、そして井川さんの「Inclusive」であることの指標である。

結論は出るはずもない。ただ分かち合うことで豊かになるコモンズと、競い合って豊かになることを土台に置く「資本主義」とは、相反するようで、「民主主義」という制度を問い直すことで、より豊かな概念に成長するのではないかと閃くようにと思えたことが収穫だった。

阿部 健一（地球研）

3. 市民の合意形成（科学技術など）、意思決定の主体の範囲

グループ4：Anthropocene と技術

ファシリテーター：寺田 匡宏（地球研）

G-01 世界の資源消費と人為的攪拌の定量的研究

吉田 圭介（名古屋大学大学院 環境学研究科
／ PhD プロフェッショナル登龍門 博士課程3年）

G-05 人新世における民主主義的な技術開発についての現状と課題

水上 拓哉（東京大学大学院学際情報学府／ IHS 修士課程2年）

R-01 Whose Anthropocene? By whom is the Anthropocene narrated?:
The Anthropocene as a historical discourse and problem of subjectivity in history

寺田 匡宏（地球研客員准教授）

R-02 環境政策の形成プロセスにおける市民参加の手法と評価

増原 直樹（地球研プロジェクト研究員）

アンソロポシーン（Anthropocene）における技術の問題を考えるためには、根源にさかのぼる必要があり、その根源は、人間の欲望や資本や貨幣にかかわるものではないかというところにたどり着いた。

人間の欲望は、人間性に具わったものかもしれないが、一方で、社会的に構築されたものである。それを、約1万年前に開始したホロシーン（完新世）における、狩猟採集を基盤とした流動社会から農耕を基盤とした定住社会への移行をメルクマールとして考えたが、一方で、そのホロシーンにおける人類の選択はアンソロポシーンの登場を導いたものでもある。これは、数千年レベルの超長期の視野のもとで見られる変化であるが、そのような巨視的な変化に対応するためにどのような解決法があるのか。具体的な解決法も語られたが、一方で、主体性のあり方や差異への向き合い方といった、人々の心性や相互関係におけるあり方の再考の必要も語られた。ミクロとマクロ、この二つを往還しながら考えてゆくことの必要が再確認されたといえる。

寺田 匡宏（地球研）



3. 市民の合意形成（科学技術など）、意思決定の主体の範囲

グループ5：市民参加

ファシリテーター：熊澤 輝一（地球研）

G-09 環境問題に関する市民参加を促進する多元的コミュニケーション強化システムの構築を目指して

許 俊卿（大阪大学大学院人間科学研究科
／超域イノベーション博士課程プログラム 博士前期課程1年）

G-11 ヒアリ防除における侵入初期での効率的なモニタリング戦略の策定

有子山 俊平（東京工業大学環境・社会理工学院／グローバルリーダー教育院）
藤岡 春菜（東京大学大学院総合文化研究科 博士前期課程1年）

R-04 環境“保全”の担保は何か——カミという民主主義

嶋田 奈穂子（地球研センター研究推進員）

認識や知識のギャップが、力のある主体（政府・行政）からそうでない主体（住民）に向けた一方的な流れを生み出す。その状況をこの班では、「強制」という言葉で表現するに至りました。住民に焦点が当たった点では共通なもの、政府、ヒアリ、カミさまと、全く種類の違う対象を扱い、視点の置きどころも全く異なるポスターたち。グループのメンバーが知恵を尽くす中で、それらが共通のことばでつながり、論じる大枠が輪郭を帯びていく代えがたい時間となりました。

熊澤 輝一（地球研）



R4 カミエリ屋

住民の認識 GAP

行政

カミ = 情報

- おさえるもの
- おさえる場所? 神
- おさえる環境? 神
- おさえる人? 神
- おさえる物? 神
- おさえる場所? 神
- おさえる環境? 神
- おさえる人? 神
- おさえる物? 神

カミの役割 "コモン"

カミの役割 "コモン"

カミ

- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"

カミ

- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"

カミ

- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"

カミ

- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"
- カミの役割 "コモン"

4. 実践（方法）、枠組み、責任としての民主主義

グループ6：民主主義の問題

ファシリテーター：近藤 康久（地球研）

G-03 汎共生の夢——パウル・カンメラーの科学思想から

相馬 尚之（東京大学大学院総合文化研究科／IHS 修士課程2年）

G-14 人新世において民主主義の場所はどこにあるのか？

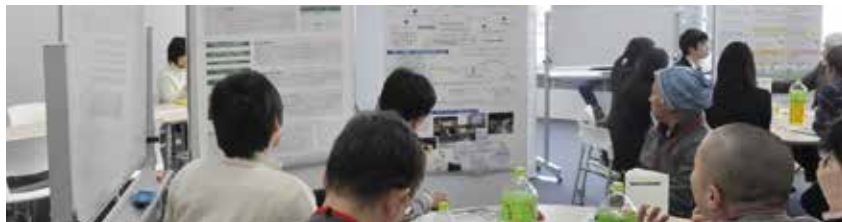
小川 歩人（大阪大学大学院人間科学研究科
／超域イノベーション博士課程プログラム 博士課程2年）

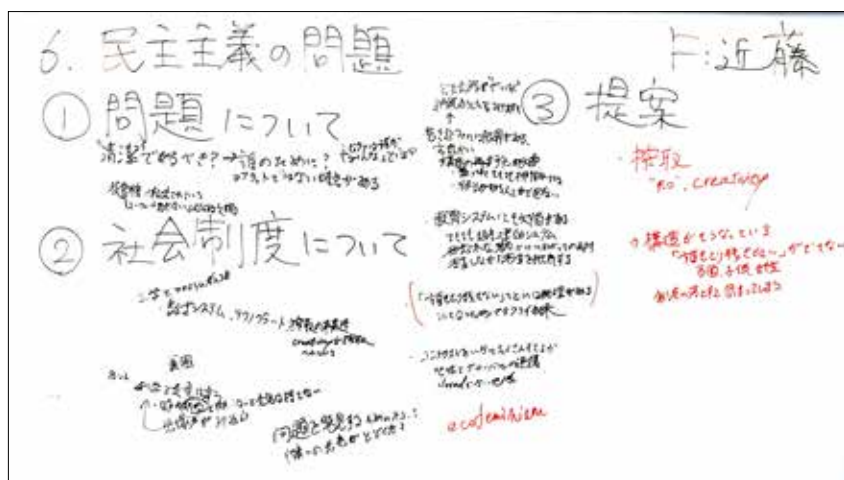
R-06 市民のアイディアで解決困難な環境問題の軸をずらす： 琵琶湖の水草資源活用コミュニティの形成

近藤 康久（地球研 准教授）ほか 11 名

民主主義をそれぞれ科学思想と社会哲学の視点から問い直す大学院生のポスター2編と、市民参加型の環境問題解決に取り組む地球研のポスター1編を鉅脈として、民主主義の「清潔性」や教育システムの問題、搾取の構造から、市民を巻き込むには限界があり、SDGsの「誰一人取り残さない」は現実的には無理があることに議論が及んだ。地球研内部での議論とは異なる視点から考察を深めることができて有意義だった。

近藤 康久（地球研）





4. 実践（方法）、枠組み、責任としての民主主義

グループ7：災害

ファシリテーター：吉田 丈人（地球研・東京大学）

G-07 「苦痛の連帯」のためのデモクラシー —— 写真家・鄭周河（チョン・ジュハ）の福島写真を手がかり

李 範根（東京大学大学院総合文化研究科 博士課程2年）

G-10 災害後の社会における創造力、利他性、ユートピア

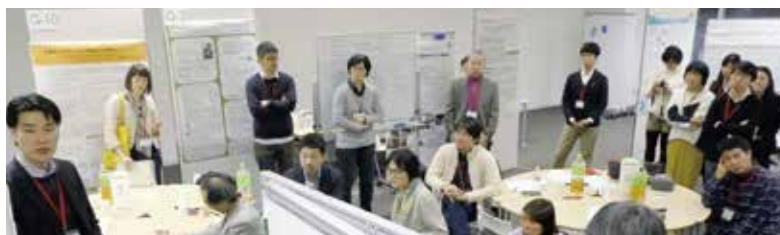
大門 大朗（大阪大学大学院人間科学研究科

／超域イノベーション博士課程プログラム 博士課程2年）

本グループでは、東日本大震災や熊本地震などに関連したグループ参加者の経験をもとにして、災害後の社会において、民主主義の主体となる民衆とは誰なのかについて、主に議論した。

被災者とボランティアといった画一的な立場を固定することの負の影響や、被災していない外部の人がどのように被災者と関わったら良いかについて、さまざまな意見が交換された。災害復興において自発的で自律性のあるコミュニティが成立することの重要性が共有されたが、その実現方法については十分に議論する時間がなかった。

吉田 丈人（地球研・東京大学）



「被害」

① 民主主義の課題(問題, 社会制度)

② 解決の提案

<p>① 民主主義</p> <p>かかわろうよ、「かわり方」は?!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・民衆の主体は誰か? ・参加の仕方 ・権力関係 	<p>② 提案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(リアルな)民主主義 ・自覚性 ・アイデンティティ?
---	---



